

講演・実習「学校での動物飼育の基礎」

中川 美穂子



研究会事務局長の中川です。また、東京都獣医師会の理事もやっております。そういう立場からお話をさせていただきます。

「教室内飼育事例・命はまったなし」

最初に筑波大附属小の森田和良先生の教室で1年生がモルモット飼育をしている様子と佐々木学級で4年生がハムスターを導入した際の授業の様子をご覧ください。

(映像)

最初にかわいい子どもの様子を見ていただきましたが、モルモットがティッシュペーパーを食べている場面で、子どもたちが「キャー」って言ったのは、「ティッシュには、手触りを良くするためにビニールが入っているので、食べると死ぬ」と言っておいたので、それを覚えていて大騒ぎしたのだと思います。また、4年生のクラスのハムスター導入授業のとき、マスクをしている児童がとても多かったのですが、担任が、保護者に前もって趣旨をお知らせし、当番の希望やアレルギーを持っている児童にはマスクをさせるという指導をしました。ただ、時が経つとだれがアレルギーか判明がつかなかったそうです。

私は、45分の授業の中で3回、「ハムスターは逃げ出すと水を求めて、トイレに落ちて死んでしまう」ということを注意しました。その度ごとに、子どもたちも先生もちゃんと頷いて了解しました。でも、その晩に逃げて、その晩のうちに死んでしまいました。学校は言葉で教え、言葉で納得する世界ですが、生き物は「知識の世界」で

はなく「本当」の世界で、「身をもって感じ、即対応しなければ、命を守ることができない」と気づけたと思います。この4年生ですが、このことずっと気に掛かっていたのか、6年生になったときに、「このままでは卒業したくない」と再挑戦して、この時にはしっかりと飼育でき、卒業時には、動物たちはすべて家庭に引き取られていきました。

1 飼育の基礎について

あちこちの教員研修では、私は負担の少ない楽しい継続飼育の実現方法とその教育的効果ということでお話をしております。我が家では庭で、犬、チャボ、ウサギ、アヒルなどを放し飼いにして、猫も交わることがあります。餌も足りて愛されていれば、喧嘩は起こらないようです。この中でいちばん手がかかり大変なのはアヒルです。学校では犬猫は論外ですが、アヒルは飼わない方が無難でしょう。

(1) 学校飼育動物とは

日本獣医師会の見解は、『子どもの成長を助けるために学校・園で飼育されている動物たちを言う』としました。この見解は、かわいそうだと言って、学校での飼育に反対している獣医師に納得してもらおうねらいがあります。愛玩動物とも家畜とも違う使命を帯びているということです。ただ、大人が愛情をもって接して見せないと、子どもの成長を助けることにはならないのです。

(2) 飼育の目的・脳の発達

何をどのように飼育するかは、子どもが欲するからではなく、学校の指導者が意図して決めてほしいと、私たちは発信しています。飼育の目的を考えなくてはなりません。嶋野道弘先生は、痛ましい事件がやまないのは、青少年たちが、命への理解がなくなり、自己中心的になり、コミュニケーションがとれなくなってしまったからではないか、と言っておられます。これらの課題に対し学校でもいろいろな対策を取っていますが、これは言葉でいくら教えても伝わるものではなく、実は、これらを感じる

神経回路を発達させなければならないということが言えます。これが、教育であるわけです。命は大切だと百万回言ったとしても、子どもたちには実感として認識されません。脳には、本能に生まれた時から恐怖と愛着という感情もあります。恐怖というのは、自分を守る自己保存のために備わっています。愛着というのは、生まれたときは母親に、大人になって異性に、そして親になったら子どもに対して湧いてくるもので、種の保存のために必要な感情です。これは、最初から完成しているのではなく、母親など対象と接している間にも育つものです。子どものうちは小さい動物をかわいがりますよね。このことは、愛着の神経を育てることに関連しているのではないかと思います。

脳には他に、言葉で教え、覚える事が出来る「知」の部分と、言葉では教えられない「運動」機能の部分があります。そしてそれらを統合して、人として生きるための知恵を司る前頭連合野があります。この脳は、幼児期から小学校の中学年くらいまでに良く発達します。すなわち臨界期は10歳くらいにあるのではないかとされています。この年齢まで体を使って十分に遊んだ子どもは、後に教科書で習う事柄を難なく理解していく、とされています。つまり、知を育てるためには幼少時代の体験が重要ということで、生活科や総合的な学習の時間があるのだと思います。

ところで、本能と理性の割合はどれくらいでしょうか。学校は一生懸命理性を教えますが、本能が9、理性が1でないと、人間は元気が無くなるそうです。やはり、欲望があって、その欲望をどのように実現できるかを考えて、努力するところが元気の源でしょう。学校で、厳しく理性ばかりを教えると、元気がない子どもになってしまうかもしれません。

①人の脳（前頭連合野）を育てる体験

昔から教育界では、子どもには7体験が必要と言われ、花、木、水、土、石、風、動物があげられています。これは幼稚園教育要領にも明記されています。環境教育でしようけど、花から風までは、子どもが触りたいといったら触れますが、動物が拒否したら動物には触ることができません。このことで、我と彼との関係を教える特殊な対象と分類されます。たとえば、5か月の赤

ちゃんですが、盛んに犬に触りたがっても、犬が逃げるので触ることができません。そこで、飼い主さんが犬を抱っこして、赤ちゃんの頬に触れさせてあげたら、その子の目がぴかりと光るのです。



これ（写真）は犬を見ているのではなく、犬との接触で、皮膚の感覚や匂いなどが脳に伝えられ、脳がそれに感動して、目の光りに現れてきているのです。つまり神経細胞が興奮して刺激を伝えたのです。神経は刺激を受けて育ちますが、このようなことを何度か繰り返していくうちに、感動する心（神経回路）ができあがっていきます。

先ほど臨界期と言いましたが、眼の神経回路は、だいたい2歳くらいで発達が終わるとのことです。眼科のお医者さんは2歳以下の赤ちゃんには眼帯をさせないそうです。それは、眼帯で、1日分の光が入らなかった場合には、1日分の光刺激がなく、神経回路の発達が悪くなるからとのこと。つまり神経には「適切な刺激」と、それを与える「時期」が大事だということです。

②幼児と動物の交流風景から発達を見る

私の猫を、猫は知らない子に触られると、とてもいやがり、時に噛みつく事もありますが、小さい子は、「かわいい」というようにネコに頭をそっとこすりつける姿を良



く見ます。そうするとネコの眼が優しくなりますね。

この子（前ページ右下写真）と猫は、言葉以外のコミュニケーション、非言語的コミュニケーションで交流しています。人間同士のコミュニケーションは、言葉を使ったものは15パーセントに過ぎないと言われています。あとの85パーセントは、非言語的コミュニケーション(まなざしやしぐさ)だということです。「ヒトと動物の関係学会」の世界大会の初期の頃に、オーストリアの学者が発表していましたが、14～16歳までの子どもたちに、週末は誰と遊びたいかと聞いて、遊びたい相手として選ばれた子どもたちは、すべてペットを飼育していたそうです。そこで、その教授は、ペットとの生活が、非言語的コミュニケーション能力を育てたのであろうと言っていました。

4歳の子どもに、幼稚園のウサギを抱いてもらいました（写真）



このウサギは抱かれるのを非常に嫌い、先生がこのウサギをしっかり抱くと、怒って先生の服をかじって穴を開けてしまいます。ところが、初めてウサギを抱いたこの子は、逃げるウサギに対し、片手をゆるめて安心させ、そして別の手で絡め取ることを繰り返しています。このウサギにしてみれば、一応逃げられるので、噛むほどには立腹していないが、なぜか自由にならないといった感じになります。これは、この子が4歳なりにとっても知恵を使って、手の握り具合や、ウサギの行動を予測し、自分の行動を決しているという現れです。また、これらのことは、全て前頭連合野で制御しています。これまでのこの子のなりの体験材料をもとに前頭連合野がはたらいて、このような状況を実現できるのです。

(2) 家庭での飼育状況と学校動物の働き

平成16年から3年間、小平市と西東京市の3年生が動物を飼っている家庭の割合と動物の種類を調査しました。複数種を飼っている場合は、イヌやネコなど、人と良く交流できる動物を上位に据えて、より上位の飼育種に重ねました。つまり犬やネコを飼っている家庭は、ほかの種類も飼っている可能性があるということです。また、人との交流が一番難しい魚を飼っている家庭は、魚しか飼っていないということで分類しました。中には、それらすらも飼っていない子が53%いました。飼育なしの内、数%の子は、カマキリやダンゴムシをペットだと言い張っています。それから、マリモと答えた子が複数いました。これは4年生にもありましたが、生きた動物が身近にいないため、マリモが動物か植物かわからないのではないかと思います。この調査や、他の先生方の調査でも、ウサギやハムスターなどを含めて、抱ける温血動物を飼育している家庭は、23%ほどで、犬猫は1割あるかないかが、わかっています。

さて、動物の子どもへの影響する理由について、日置視学官は、『①動物がかわいくなる：動物がかわいくて大切な存在になると、死なれては辛いので、守るために必死に工夫するようになる。つまり、子どもはかばわれる存在だが、自分よりも弱いものをかばうことを覚える。②心的視点移動：動物の気持ちを考えるようになるが、同じように動物をかわいがる友達の気持ちもわかるようになる。③三項関係：動物を介在して関係がマイルドになり、コミュニケーションが活発になる』とおっしゃっています。そして、これは私の考えですが、何より動物は、子どもにとって魅力的で入りやすいということです。

(3) 効果的な飼育活動にするために

①負担を減らす努力を

前述のように、動物をかわいいと思っではじめて飼育活動が効果的になります。かわいくなるには、大変過ぎる飼育ではなく、笑い声が漏れる楽しい飼育にするということが大事です。先ほど大竹副学長がおっしゃっていましたが、何年か前の飼育はたいへんな状況で苦労ばかりで楽しくなかったもので、改善なさったとのことでしたが、学校としては掃除しやすい飼育舎を用意し、世話が簡単な動物を少数だけ飼育すればよいのです。珍しい動物を飼う必要はありません。

せん。また、繁殖を制限して飼うことも必要です。増やすときには、もらい手を予め見つけておいてからにして下さい。休日は、保護者が当番児童に付き添うことも大切です。また、地域の獣医師の支援を簡単に得られる必要もあります。この地域は簡単に得られますので、申し出てくだされば獣医師は動くことができます。飼育活動のモットーは、「いつでもどこでも誰でもできる飼育活動」です。なお、動物種については、感情を見て取れる動物種の選定が必要です。資料の推奨できない動物の表をご覧ください。これは白梅学園大学院の論叢のために作った表ですが、幼稚園から高校までの飼育活動の目的と動物種の選定、子どもへのかかわらせ方、季節への注意点などの動物への対応などを表しています。参考にしてください。

小平の鈴木小学校は飼育舎の床をコンクリートに改善して、掃除しやすくしました。3畳くらいの2部屋があり、各部屋にウサギが2羽、チャボが4羽います。それぞれに巣箱を入れて風雨と冬の寒さに備えています。出入り口のある巣箱の蓋を開けて、毎日掃除します。なお、ウサギの部屋にトイレが入っていますので、トイレを掃除していれば、飼育舎の床はきれいに保てます。巣箱のない飼育舎では、大雨の時など、ウサギがびしょ濡れになったり、時には、おぼれて死んだりします。また、厳冬期には、かならず巣箱が必要ですが、床から高くして湿気と寒さを防いでください。（「特集飼育舎」動物飼育と教育11号参照のこと）

(4) 衛生上の課題への考え方

学校は衛生上の不安を持ちますので、支援する獣医師の職域を述べます（下図）。

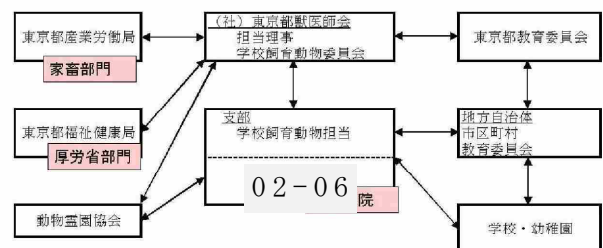
獣医師の仕事（獣医学）

- ・ **基礎医学**: 微生物 病理学 実験動物学 薬理学
人と動物の共通感染症 人の病気 研究者 厚労・農水
BSE 鳥インフルエンザ、狂犬病、エボラ出血熱、新型インフルエンザ 等
- ・ **家畜衛生**: 家畜の病気 @ **安全な食料の確保** *
(豚コレラ・BSE・口蹄疫) 畜産の管理と支援 農水省
- ・ **公衆衛生**: 食品 02-05 (サルモネラ) @ **人の安全・衛生**
食堂の衛生 給食の安全・検査・管理指導 厚労省
- ・ **家庭動物の診療・動物愛護** 生活の質の向上 農水・厚労
- ・ **生態系保護**: 野生動物 将来の生活の質の向上 環境省
- ・ **薬の開発**: 薬理学 実験動物 製薬会社 農水・厚労
- ・ **法医学**: 病理学 人の死因の解明 病院など
* * 動物に関して唯一の国家資格 * *

獣医師は、国が与えた国家資格で、国民

の食糧の確保のために農林水産省から与えられます。また、国民の衛生的な生活を確保するために、公衆衛生を任されています。つまり家畜の診療・健康維持指導と繁殖生産指導、細菌やウイルスなどの感染症予防の研究などに深く関わっています。その延長上に小動物の診療（動物病院）があります。また、大学の研究者や農水省・厚労省の研究職や行政職の獣医師もいます。例えば、先日の新型インフルエンザが流行したときにテレビで会見していた厚労省の健康局結核感染症課の職員は獣医師です。また、口蹄疫やBSEでもいろいろな専門家がテレビでコメントを出しましたが、彼等は大学の獣医学博士（教授）です。さらに獣医師は、動物愛護、生態系の保護などで、環境省に関わってきたりもします。鳥インフルエンザの時は、獣医師が心配していないのに、学校で大騒ぎになりましたが、獣医師会は必要な時に、学校等に対応します。安心してください（下図）。

獣医師会、教育委員会による学校の動物飼育支援体制(東京都)



学校の飼育の必要性→課題→対応法→支援の結果・児童への成果

日本では動物の病気で死んだ人は若干名しかいないと、厚労省の専門家の情報です。その若干名というのは、免疫が低下した人です。いわゆるAIDSや白血病が考えられますが、これ等の病気では、普通にある常在菌、例えばビール酵母が体について亡くなった事例もあります。健常な方が怖がることはありません。

しかし、外国ではエボラ出血熱など怖いのがあります。ですから、厚労省は珍しい動物は飼わないようにと言っています。ですから、輸入動物は学校でも飼わないことです。それから野生動物も不適切です。野生動物は、衛生管理も出来ていない上に、人に慣れないので時に噛みつくなど危険があり、飼っている意義がありません。

①学校での衛生上の注意点

(ア) 導入する動物：学校では、ウサギが3羽死んだらもう怖くて飼育舎には近づけないという先生も見られますが、感染症の専門家によれば、ウサギは人に感染するウイルスや細菌の病原体が、不思議にない動物だそうです。野兎病というのはありますが、これはノウサギが感染する病気です。したがって、ノウサギをカイウサギ（学校のアナウサギなど）に近づけないように飼えば大丈夫です。

モルモットやハムスターはネズミと同じ齧歯類なので、ネズミの病気がこれらに移る可能性はあります。ですから齧歯類では、ネズミとの遭遇のない動物を飼う必要があります。つまり、病気予防には、病気のない実験動物などを導入することが大切です。獣医師の支援が必要です。

ウサギ等の皮膚に荒れやかさぶたがあったら、カビからくる水虫かもしれません。私は、ウサギの水虫治療したときに感染し、1ヶ月の薬服用と、外用薬塗布で直しましたが、動物は、投薬の他、薬浴を自分では出来ないため、ウサギを乾かすのに1匹でも手がかかります。また、水虫を根絶するためには飼育動物全部の治療が必要です。5匹もいたら、手間も金銭的にも大変な負担で、治療は難しいのです。なお、動物病院には、飼い主から移された水虫のネコやウサギが来院します。この人も動物も共通にかかる病気を「人と動物の共通感染症(人畜共通感染症)」といいます。学校では皮膚にも病気を持たない動物を導入し、乾燥を保てる飼育舎で、毎日掃除をして、カビにかかせないことが大事です。

(イ) 常識的な接触を：サルモネラの不安で、カメを飼ってはいけないと言われたことがありましたね。あれはカメをすっかり口に入れてしまい、サルモネラの食中毒にかかったことから指示がでました。つまり啜えず、触ったら手を洗うなど常識的な接触をしていれば、心配ありません。

(ウ) 人に病気をうつす最大の動物：ウイルスは同種の動物どうしでやりとりします。したがって、ヒトに病気をうつす動物はヒトでしかあり得ないのです。だから、インフルエンザが流行すると休校になりますが、鳥インフルエンザが流行しても休校にはなりません。また、人が病気をうつしても、皆許し合いますが、動物の病気がうつると懸念した瞬間、動物を処分してしま

うことがあります。冷静な判断を持ち、人権を大事にするようにと教育している学校としては、いかがかなあ、と思っています。

ある学校の校長が、カメの処置に困って冷凍庫で殺して、それを見た先生が長く悩んでおられた事があります。その先生に、最初に獣医師に相談できたのに、と申し上げました。最初に、菌の有無を検査し、もしも菌を持ってたとしても、治療ができました。育ててきた子ども達のカメへの愛情を大事にして、科学的な処置をすることが出来たと思います。

②衛生課題への調査結果から

06年に、東京都教育委員会と獣医師会と一緒に自治体教委向けに行った「学校の飼育動物が子どもの健康に被害を及ぼした事例」に関する調査では、1件の心配以外は皆無でした。心配は鳥インフルエンザに関してでしたが、東京都では鳥インフルエンザは発生してないので、被害を及ぼしたと心配な事例はなかったということです。獣医師には、共通感染症の有無を問いました。破傷風に感染したウサギの事例がありましたが、その学校の土に破傷風菌がいるので、子ども達も土のついた傷を良く洗い消毒する必要があると言うことの警告だと言えます。ウサギは被害者で、ヒトにかみついて破傷風がうつると言うことではありません。

③衛生で忘れてはいけないこと

(ア) 人を含んだ全ほ乳類に感染する狂犬病：漢字の国では「狂犬病」と書きますが、それ以外の国では、レイビーさんからウイルスが発見されたので、レイビー病といいます。現在日本での死者はありませんが、ロシア船に犬がお守りとして乗船し、ビザなしで上陸しています。また、南方からの貨物船に紛れていたコウモリにウイルスが見つかることがあり、日本は、国内での犬への狂犬病ワクチン接種と、外国からの病原への水際作戦を繰り返しています。逆に日本人が外国でイヌに噛まれて、日本に戻ってきてから発病するというケースが見受けられます。ある年、教員研修でアメリカに行った人が、よたよたと近寄ってきたコウモリに噛まれて、血相を変えた現地の人の助言ですぐにコウモリの検査してもらって、ワクチンを打って発症を逃れた事例があります。狂犬病は発症した者はすべて死亡する病気です。2003年頃、毎年世界で7

～10万人も死んでいました。中には政情不安定で統計がとれない国もありますが、近年では、死者は4～7万人と言われていす。鳥インフルエンザなど、この狂犬病に比べたら、なんということないでしょう。外国に出かける人が増えている現在、本当に知っていなくてはならないのは、こういう知識だと思うのです。

(イ) 小型ハムスターへのアレルギー：咬まれた時、アナフィラキシーを起こす人が見られるのは、ジャンガリアンなどの小さい種類です。ゴールデンハムスターは血液が異なり、別の動物なのです。学校では実験動物のゴールデンハムスターを飼う方がよほど安全で楽しめます。なお、ハムスターは、仲間で喧嘩が激しいため1匹飼いが適当です。

(ウ) アレルギーへの考え方：これは個人の課題で、各人の対応が重要です。教室で動物を飼うときに、アレルギーの子がいるから全員飼えないというのでは、あまりにも非科学的な全体主義と言えます。大事なものは、本当にその動物にアレルギーがあるのか、どの程度まで近づいたら反応がでるのか、どのような症状が出るのか、そういったことを本人も見極めることです。その上で、その子は、反応の出ない条件を守ってつきあえば良いでしょう。また、これらの条件を、自分で把握しておくことが、学校以外でも遭遇するかもしれない危険を回避する意味で大切なことです。あの春の花粉症の時期、各人で対応しながら、花粉というアレルギー物質の中を冷静に歩いているのを思い出してください。実際の例では、事前に親御さんが心配しても、子どもが動物により楽しい気分になり、アレルギー反応がなくなる事例も結構見られます。

「アレルギーの発生が少ない条件」ははっきりしており、①兄弟の多い子ども、②牧場に住んでいる子ども、③発展途上国の子ども、つまり、ほこりっぽいところに住んでいる子どもです。ですから、汚い環境で遊んでいる子の方が丈夫？ 少なくとも、清潔すぎる環境はアレルギーを減らすためには効果がないというわけです。

(5) 学齢による動物介在教育の方法

幼稚園の場合は感性を開発するということで、子どもが興味を示したものを飼って一緒に楽しんでいただくことが大切です。生活科で継続飼育が始まりましたが、飼育

舎での飼育は体力的に無理がありますので、モルモット以下の小さい動物を身近に飼うことがよいと思います。飼育舎での飼育は、興味関心と体力が十分な3～4年生に最適です。そして学年全員で関わることで、教育的な影響を全員に与える事が出来ます。多くの学校で、高学年の飼育委員会で担当していますが、この年齢はもう大人の部類で、好き嫌いがはっきりできあがっていますので、成長への刺激にはなりづらいと言えます。また全校で、20～30人程度が関わるだけなので、あれだけの立派な施設なのに、もったいないと思います。高学年は直接的には動物飼育には関わらせず、それまでの体験をもとに、畜産や環境問題、介助犬、警察犬など人と動物の関連について、調べたり、他の子どもたちに紹介するような活動が良いのではないかと思います。学級活動として動物飼育をしている場合は、先生の動物ではなく、子どもたちの飼っている動物との意識を与えることが必要です。冒頭のモルモット飼育の学校では、3学期になると、モルモットの幸せな行く末を学級全体で考えます。行き先が無い場合は、処分！と大騒ぎですが、毎回、各家庭が引き取って終わります。毎週末は家庭で世話しますので、親は子どもの心配を受け入れるようです。

①教科に位置づけた飼育活動

西東京市立保谷第二小学校では、4年生の総合的な学習の時間に、「命の教育」と飼育活動を位置づけています(下図)



また、年間の計画表には、ねらい、評価、学期ごとの活動と、最後に他教科とのかかわりという部分がありますので、あとでご覧ください。これによると4月にガイダンスとしての動物とのふれあい教室。4年生が1年生に動物のことと、ふれあいを支援

する兄弟活動。2学期に飼育体験からの疑問を獣医師に質問する会。飼育を題材にした作文活動。3学期になると下級生への飼育引き継ぎ集会があり、子ども達は培ってきたことをまとめて発表します。これは子ども自身の振り返りでもありますし、先生の振り返りでもあります。また、休日は4年生の保護者が親子で世話をします。このために、4月当初の保護者会で、校長も学年主任も担任も、飼育は命の学習なので、保護者の協力が必要と繰り返し伝えます。つまり、飼育は教育活動であるということ認識して、保護者に発信することが大切です。「動物を好きな人に飼育をお願いします」と、長く特定の保護者ばかりが携わる

ようになって、他の人は好きでやっているのだからと知らんぷりをしているし、自分がやめると動物が死ぬだろうと心配でやめられないという状況になり、頑張る保護者から恨みが噴出してしまいます。道徳の公開講座の時に、そのような保護者が抗議したのを聞いたことがあります。したがって、教育に位置づけて、全学年で親も一緒に一年間だけ関わるというのが（もちろん担任が一年間飼育担当になります）、親にとっても教師にとっても楽で安心ということになります。おかげで、動物を可愛く思い、飼育を楽しむゆとりが出ます。年間教育計画とふれあい授業を添付します。

○年間教育計画・総合的な学習における「飼育」の指導（西東京市立保谷第二小学校）

1, 単元名 飼育を通して（第4学年）

2, 単元の目標

- ・動物の飼育体験を継続して実施することにより、生命尊重の心を育てる。
- ・動物に対する興味関心を高め、飼育の過程で生じるさまざまな課題に創造的に取り組める資質を育てる。

3, 評価規準

学習活動への 関心・意欲・態度	総合的な思考・判断	学習活動に関わる 表現	知識を応用し 総合する能力
○動物の飼育に興味を持ち、自分から進んで世話をしようとする。 ○思いやりのある態度で動物に接したり交流しようとする。 ○友達や3年生に飼育の仕方や様子を伝えようとする。	○毎日の世話は苦勞も多いが、その地道な活動が命をつないでいることを考えることができる。 ○生き物と人間の関係について調べたことを基に、相互のかかわりについて考えることができる。	○体験したことをさまざまな方法で、ほかの人に伝えるためまとめることができる。 ○引継ぎ集会の計画・実行にあたり自分なりに伝え方を工夫することができる。	○動物の世話の仕方には、それぞれ理由があり、そのときの状態に応じた接し方に気づくことができる。 ○生き物の特徴や、人との違いに気づくことができる。

4, 年間指導計画 ○の中は、時数。

- ・4月・・・初めての飼育活動開始。仕事の手順、当番のローテーション、休日飼育等の確認。④保護者会での説明。（生命尊重、使命感、心の成長、親子飼育ボランティアの説明。）
- ・5月・・・次の学級への引継ぎ集会。②
飼育入門オリエンテーション『動物ふれあい教室』（獣医師との連携）②
- ・6月・・・飼育新聞作りー1。ニュース仕立てにした発表会。④
- ・7月・・・夏の間の飼育方法の確認、当番の分担。夏の飼育活動。②
- ・9月・・・「動物教室でさらに関心を高めよう」（獣医師との関連）②
- ・10月・・・飼育新聞作りー2。④
- ・11月・・・動物の気持ちを感じて学芸会に取り組もう。④
- ・12月・・・冬の間の飼育方法の確認、当番の分担。冬の飼育活動。②
- ・1月・・・引継ぎ集会の持ち方。プログラム、資料作り。④
- ・2月・・・3年生への引継ぎ集会。②
- ・3月・・・3年生飼育見習い期間。（3年生と共に飼育をする期間）③

* 休日も含めて毎日の常時活動を当番制で実施する。

5. 他教科との関連

- ・ 国語・・・体験したことから文章は溢れるように出る。飼育新聞作り二回を通して表現させる。また、作文教材と関連させた指導が効果的である。学習発表会の台本作り、演技の取り組みでは、飼育体験の感想をセリフにしたり、飼育動物と登場する動物との違いや共通点を考えながら演技を考える指導。
- ・ 理科・・・季節による動植物の変化の単元の、生命の連続性と関連させる指導。また獣医師の支援を得て子どものもつ疑問を掘り下げ、新たな疑問・事象のつながりに興味を持てる指導。
- ・ 体育（保健）・・・「育ちゆくわたし」の単元で体の成長や、第二次性徴と関連させる指導。
- ・ 図工・・・愛情をもってかかわっている動物に対して、興味を持って観察するため大きな表現力を発揮することが見られる。
- ・ 道徳・・・弱いものを支配しようとする潜在的な心情や独占欲に気づき、初めて相手の立場を思いやる心が育つ。「〇〇してあげる」から「〇〇してほしいのかな」という同等の立場まで深まっていくことで対等の関係ができる。ここまで意識が高まる「飼育」は、道徳的価値の高い体験活動といえる。

○飼育導入ふれあい教室授業案

() 小学校 飼育委員会または 学年 (クラス) 担当 () 教諭
月 日 () 時間目 午後 時 から 45分授業 (準備は30分前から)

目的

初めて飼育を担当する子どもたちに、獣医師の支援を受けて、動物の気持ちや体のことを伝えながら、動物を抱かせる体験をさせる。それにより、生き物の実感を通して興味を持たせ、親しみをわかせるように誘導する。また、これ以後、子ども達が情をもって動物の世話をすることにより観察が細かくなり、生体の営みを理解し、弱いものへの思いやりや接触した喜び、生物にたいする科学的興味を培うように期待する。同時に、獣医師との交流で理科的な刺激を与え、将来の職業選択の幅をひろくしたい。

「ウサギとチャボを知って、世話しよう」

会場：多目的室【注意・野外と体育館は避ける】

児童： 名 () 班に分ける(1班 6～10～15名ほど)

担任の先生：() 名 () () それぞれ1班につく(獣医師等補佐)

保護者：(1班あたり1～2名)(20分前に集まって頂き、抱き方など実習していただく)

参加動物：学校の動物(ウサギ 羽, チャボなど() 羽)

【注意・不足分は近隣校から借りる】

獣医師： 名 獣医師会 ()

支援： スタッフ 名

準備段階で「動物が怖がるから騒がないで、静かにしてあげてください」と注意

時間	内容	備考
挨拶 1分	(担当の先生) 紹介	子どもさんを最初から班に分けて手を洗ってもらって下さい(※)
動物の話 8分	最初に、騒がないように注意(動物がこわがる) ニワトリ、ウサギとの仲良くなり方 動物の話をちょっとだけ、人への影響	獣医師・フリップで 絵を示して説明 あるいはPCから映写
動物の体 5分	抱き方指導 潰さないように、噛まれないように 心音を人と動物と比較	担任、子ども、動物と順に心音を比較(先生も心臓提供) 拡大心音計使用 かけ算

ふれあいタイム 15分	班にわかれ、ふれあう。 各班に担任の先生や保護者などの補助者がひとりずつつく 動物を配布（介助者が一匹ずつ つれて班につく）	正座のしっかりした膝にバスタオル2重に折って膝に置いて、その上に動物を抱かせる。 バスタオル1班あたり2枚 学校でご用意お願いします
質問タイム 10分	（担任が質問者を指名）	回答、獣医師
挨拶 1分		（獣医師）命を握っているのは「みんな」です。
まとめタイム	（担任）	挨拶

- 宿題 何か一つだけ、本当に思ったこと、気になることがある人は書いて、後日獣医師に渡す。（できたら先生もご意見をいただきたく。）
- 学校用意：バスタオル1班2枚、新聞紙、（プロジェクター）、（マイク）動物（ダンボール等に入れて、会場におくがうるさいチャボなら最初は室外におく。喧嘩する同士は箱を分ける）ゴミ袋、ティッシュ、電源コード（3ヶ口）長机（心音拡大計と動物と資材おき プロジェクターとPC用計2ヶ）

○動物の話しポイント

●すみか

本当はウサギは野原で暮らしていて、いつでも食べ物はあるし、綺麗なところで寝ることができる。

しかし、このウサギたちは、一年365日、ここで目を覚まして、ここで排尿、排便してたべて、またここで寝る。それは自分だったら辛いでしょ？でも外に出すと犬や猫におそわれるから、出さないけれど、みんなのためにここで暮らしている動物達が辛くないように、餌に注意して、せめて綺麗なところで暮らせるように、毎日お掃除をしてあげてください。

●食べる

人は一日3回食べているけど、動物だからって、一日一回はつらいかもしれないし、土日は食べなくて良いということは、ない。人と同じに朝はお腹がすいている。学校にきたらちょっと小屋を覗いてあげて、水がなかったら足してあげ、餌もなかったら入れてあげる。うちから野菜をもってきたら喜ぶね。チャボのためには、大きいと食べられないから、うちで野菜をほそく刻んで持ってきて、なにが好きか、いろいろやってみてください。（生の芋や豆、アボガド、またネギのようなのはダメ）命には休みがないので、おうちの人に一緒に来てもらって、休みにも食られるようにしてあげて。

●からだ

人より小さい、自分がウサギだったら、ウサギに触ろうとする今のあなたはどのくらいに見えるか、を想像させて、ウサギから見たら自分は巨大な大きさだと感じさせる。また、大福餅がつぶれない程度の力で優しく膝の上で包み込む。ギュッと持つと、肺臓の入っている胸が動けなくて、呼吸ができなくなるから。

●気持ちを想像する

動物はみんなより小さいから、怖がっているのは動物の方だから、優しくしてあげて。動物は言葉を言えないから、どうしたいのか、何か困っていないかを考えて、良くみてあげて。

@飼育導入授業の最初に、子ども達に呼びかけること

学校で、いろいろなことを勉強して、たくさんお金を稼ぐえらい人になっても、後で悪いことをしたら悲しいよね。そうならないように、人の悲しむことはしないで、人と仲良くでき、命を大事にする人になること。

そのためにも小学生の今、勉強しているのですよ。動物は口がきけないから、みんながその気持ちを考えてあげられるようになったら、お友達の気持ちもわかるようになりますよ。

だから学校の先生方は、学校で動物を飼って、皆に可愛がってもらおうと思っているのですよ。

動物が喜ぶように可愛がったり世話をしあげたら、そのうち安心してなついてくれます。可愛いですね。実は、動物が優しくなるかどうかは、みんながどのようにしてあげるかで、決まりますよ。

② 獣医師の授業支援

1学期・保護者の飼育への理解を得て、毎週末の世話のとき、児童に付き添うようにするため、1学期のふれあい教室には必ず保護者の支援を求め、児童の輪の中に入って、動物の受け渡しを担当してもらいます。そうすれば獣医師2名の外部講師で、3クラス一緒に授業を行うことができます。先の話のポイントで示したことを話しますが、日常の餌やりの注意、たとえば、餌を与えていても、必ず餌に触ってみることも大事です。時には、餌が雨に濡れて固まって、動物が食べられない状態だったり、中にはカビが生えていたりすることもあります。ですから、前日の食べ残しはすべて捨て、食器を洗って新しいのを入れるように伝えます。

2学期・児童の質問に獣医師が答えます。質問を前もって受け取り、獣医師も準備しますが、児童は様々なことを聞いてきます。また、なぜ獣医師になったのかという質問を受けることもあります。獣医師は、多くは「小学校4年の時に…」という話をします。私も同じでしたが、小学校の3～4年生は原体験を体験する時期でとても大切な時期なのではないかと思います。

3学期・引き継ぎ集会には、一年間培ってきたことをまとめて、次の飼育学年に知らせ、飼育の方法を伝えます。これは4月当初に描かれたウサギの絵(スライド)が、3学期になる格段にかわります(スライド)。愛情をもって日々見てきたということだと思います。

2 動物ふれあい教室の実習

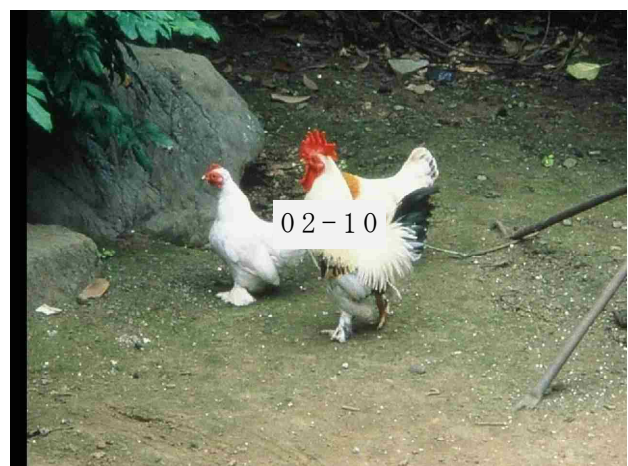
飼育を始める児童に、最初にガイダンスとして行うが、動物にも感情があることを話、その感情を洞察して、体を気遣うように話す。これにより、思いやりの心を培い、命の基本を理解するように発信する。

(1) 小学生に見せるスライドと話の内容



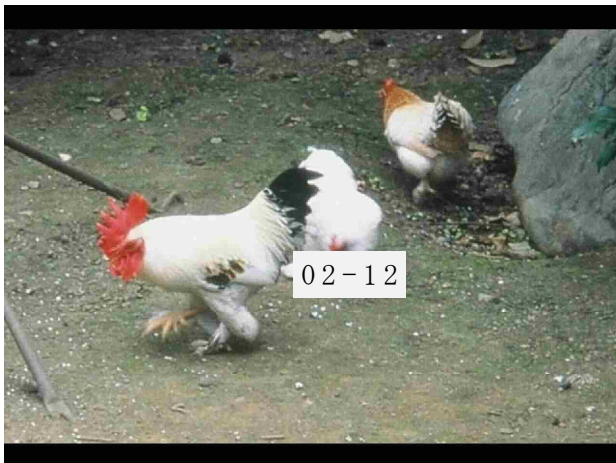
なぜ学校に動物がいるか？

- 学校で国語とか算数を勉強して良い仕事をしてお金もちになっても、人のお金まで欲しくなるとしたら淋しい。人の気持ちがわかれば、とられた人の気持ちがわかるので、悪い人にはならない。
- 動物は言葉を話さないから、何を考えているのか、その気持ちを考02-09訓練ができる。そのために先生方は大々的に学校で動物を飼っている。
- 例・この写真、何か？どんな顔しているかな？
犬は安心しないと(急所なので)お腹を見せないが、子犬はお母さんが守ってくれているから、安心してお腹をみせて寝ている。お母さんは普段はお腹を見せられるが、このカメラが子どもを傷つけるかと心配している。(そんな気持ちが見えますか？)



これチャボ、

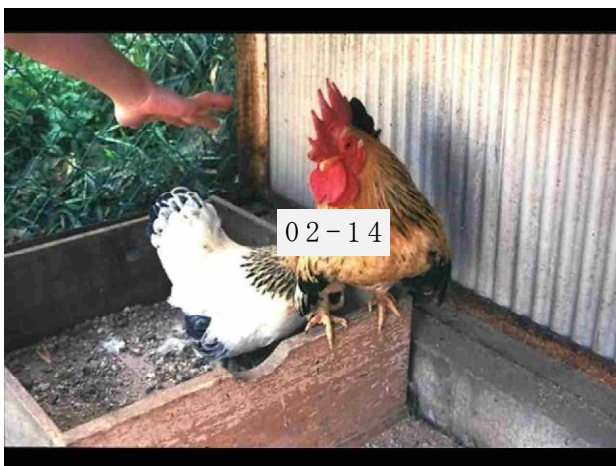
- オスはどれ、なぜオス、あ、とさかが大きいね。
- (こちらからカメラでうつしているけど)
- オスはカメラと02-11 いて、こちらを見ている、
- 怪しい敵がきたら、ケーケーって、危ないよと大きな声でなきます



あ、これもカメラとメスの間にいるね
なぜかな？

(子ども答えから、「メスを守っている」を拾って)

- そうだね、メスを02-13 んだね。
- それに 今、草をさがしているけど、見つけたらメスにあげるんですよ。自分の子どもを産んでくれるメスを大事にするんですよ。
- 草をみつけると コココと 優しい声でメスにしらせますよ。栄養をあげるんだね、



ほら、わざと脅かしてみた

- カメラだけでも怖いのに、わざと手をだしておどかしている様子 です(悪い人ですね)
 - オスは、とても、' + ナ'も怖いけど、
 - 頑張っ、立ち02-15、メスを隠してあげているね
- 言葉は話せないけど
- チャボも人も心配したり、家族を大事にする気持ちは同じなのですよ



これは金曜日(休み前)の兎

- 金曜日に沢山餌を入れて、土日に誰も来ない学校。兎が利口ならきれいに3日分に分けて、汚さないようにとっておいて食べるけど、できると思いますか？
- みな一日何回食べているの？ 3回？
- 動物も一日2回は1、02-17)です。3日に1回のご飯では体を悪くします。休みの日には、お父さんや母さんたちと学校に来て、世話してあげて。
- それに、この部屋でおしっこもウンちもご飯も全部するんだけど、みながこの兎だったらどう思う？ 一年365日やってられる？ :命には休みが無い

